様式第２号

平成２５年度　　独 創 的 研 究 助 成 費 実 績 報 告 書

平成２６年　　月　　日

<table>
<tr><td>申　請　者</td><td>学科名</td><td>保健福祉学部
保健福祉学科</td><td>職 名</td><td>准教授</td><td>氏 名</td><td>池田　隆英　　印</td></tr>
<tr><td>調査研究課題</td><td colspan="6">「子どもの理解と援助のフレームワーク」の汎用性・有用性の検討
－新たな指導法の構築に向けた研究と実践への臨床的アプローチ－</td></tr>
<tr><td>交付決定額</td><td colspan="6">200（千円）</td></tr>
<tr><td rowspan="3">調査研究組織</td><td colspan="2">氏　　名</td><td>所属・職</td><td colspan="2">専門分野</td><td>役割分担</td></tr>
<tr><td>代表</td><td>池田　隆英</td><td>保健福祉学科
准教授</td><td colspan="2">教育学、社会学</td><td>調査研究の企画、実施、分析、総括</td></tr>
<tr><td>分担者</td><td>楠本　恭之
中原　朋生
光田　尚美</td><td>岡山短期大学
准教授
川崎医療短期大学
教授
近畿大学
講師</td><td colspan="2">教育史学
教育方法学
教育哲学</td><td>先行研究の整理・考察、実地調査の分析・考察
先行研究の整理・考察、実地調査の分析・考察
先行研究の整理・考察、実地調査の分析・考察</td></tr>
<tr><td>調査研究実績の概要</td><td colspan="6">本研究は、本学の独創的研究助成費に基づき過去２年間にわたって行ってきた「子どもの理解と援助のフレームワーク」の一連の研究に位置づく。この「フレームワーク」は、保育者（保育士や幼稚園教諭）や教師（就学後の学校教育の教諭）が子どもの理解・援助するための基本的な枠組みである。本年度の実績は、以下の通りである。

（１）「フレームワーク」の理論的な検討
従来の保育学や教育学では、子どもの理解の研究は主として心理学を基盤に、いわゆる「指導法」の研究は主として教科教育学を基盤としてきた。対象理解のための枠組みは心理（内面）に偏っているために、子どもを総合的にとらえることは難しい。また、対象援助のための枠組みは教科（内容）に偏っているために、子どもを主体的にとらえることは難しい。しかも、具体的な実践の過程を観察・分析の対象として子どもの理解と援助を具体的に関連づける研究はほとんどない。
<table><tr><td>①　保育内容の歴史</td><td>保育内容「５領域」の成立過程の歴史的経緯</td></tr><tr><td>②　養成課程の制度</td><td>保育所保育指針・幼稚園教育要領と保育者養成課程の整合性</td></tr><tr><td>③　養成課程の内容</td><td>保育者養成課程の保育内容と保育技術との関連性</td></tr><tr><td>④　保育内容の系統</td><td>保育内容「５領域」と教科教育「５教科」との系統性</td></tr><tr><td>⑤　指導法の要素</td><td>保育内容や教科教育の「指導法」における要素と関連性</td></tr></table>「フレームワーク」と関連が深い保育内容や養成課程に関する研究上の課題としては、上記の５点を挙げることができる。そこで、本年度の調査研究では、本研究と直接的に関連が深い、課題⑤について理論的な検討を行った。</td></tr>
</table>

調査研究実績の概要	（２）保育の生活場面の具体的な実地調査 平成23年度には，実践を分析する共通の枠組みの必要性や「フレームワーク」の基本的な要素を理論的に検討したうえで、保育現場を対象にビデオや写真による予備的な実地調査を行った。また、平成24年度には、「フレームワーク」の基本的な要素の１つである「人間理解の位相」を用いて、保育所の３歳未満児、幼稚園の年少児、幼稚園の年長児、小学校の児童を対象に分析を行った。本年度は、これまでの調査研究を踏まえ、これまで以上に、対象児の年齢や学年、観察の時期や期間、観察する生活の場面を網羅して、実際の保育・教育の実践過程を対象に分析を行った。 一連の研究として、対象（就学前から就学後）、時期や期間（学期や行事）、場面（生活や遊び・学習）を想定して、可能な限り網羅できるようにリサーチ・デザインを行っている。対象となるフィールドや予算などを考慮し、本年度は、就学前の乳児や幼児を対象とし、乳児の食事（光田）、幼児の「ことばの指導」（池田）、年少組のリズム遊び（楠本）、年長組の外遊びの振り返り（中原）を分析した。その結果、一連の分析結果と同様に、子どもの理解や援助を「フレームワーク」によって分析することが可能であり、保育や教育の実践に一定の有効性をもつことが示唆された。 （３）研究で得られた成果の社会的な発信 本年度は、「フレームワーク」の基本的な要素である「人間理解の位相」（生体・意識・行為・状況）や「機能形成の領域」（言語・認知・表現・身体）を考慮に入れて分析を進めた。従来、実践の事例分析や事例紹介の論考は、研究上の課題や実践上の経験が焦点であり、実践を分析する「共通の枠組み」がなく、汎用性・有用性が乏しい。一方、この研究は、なぜ適切なのか、なぜ成功なのか、といった「実践の成立条件」を明示できる。 こうした問題意識に基づき、本研究で得られた知見を社会的に発信することによって、その汎用性や有用性を検討した。関連する学会（中国四国教育学会第65回大会／高知工科大学）で分析結果の一部を発表を行うだけでなく、カンファレンスでの紹介・解説を行いながら現場からの意見を頂き、成果報告書『「子どもの理解と援助のフレームワーク」の汎用性・有用性の検討』として刊行した。実際、学会発表や行政指導においても、すでに本研究の独創性が注目され、期待の声が寄せられていることから、今後の発展が研究や実践において一定の貢献が可能であることを示している。「フレームワーク」によって，これまで以上に合理的で明示的な意味を実践に見出すことができ、研究者や実践者が実践の質的向上に向けた研修を行うなど，地域貢献の一助となる。 『保育実践のフレームワークの基礎的研究』（2012）では、従来の保育の実践や研究の課題を理論的に整理し、その課題を踏まえて、関連する領域の研究成果をもとに、子どもの理解と援助に必要な「フレームワーク」の基本的な構成要素を検討した。これは、あくまでも予備的なものであったため、『保育実践のフレームワークの理論的・実証的研究』（2013）では、保育の具体的な生活場面を対象に実証的に分析することで、保育実践の過程を分析する観点としての「フレームワーク」の適用可能性を探求した。本年度は、『「子どもの理解と援助のフレームワーク」の汎用性・有用性の検討』の一環として、実践者によっても分析枠組みとして活用できるのか、実践への適応可能性を模索した。なお、保育者の専門性の向上は施策上の課題であり、多くの保育者養成課程で苦慮するところであるが、「フレームワーク」の研究は、こうした課題に対応する基礎的なデータを提供することができ、広く保育者養成課程の特色となりえる。

成果資料目録	『「子どもの理解と援助のフレームワーク」の汎用性・有用性の検討－新たな指導法の構築に向けた研究と実践への臨床的アプローチ』（岡山県立大学特別補助金・独創的研究助成費平成２５年度　研究成果報告書）